

Title	塩原勉教授研究業績
Author(s)	
Citation	年報人間科学. 15 P.199-P.204
Issue Date	1994
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/4558
DOI	10.18910/4558
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

塩原勉教授（昭和六年二月二十三日生まれ）

昭和三十年三月 京都大学文学部卒業

昭和三十二年三月 京都大学大学院文学研究科修士課程修了

昭和三十六年三月 同右 博士課程修了

昭和三十七年四月 関西学院大学社会学部専任講師

昭和四十年四月 同右 助教授

昭和四十四年十月 奈良女子大学文学部助教授

昭和四十七年四月 千葉大学文学部教授

昭和五十一年五月 大阪大学人間科学部教授

昭和五十七年四月 大阪大学評議員（昭和五十九年三月まで）

平成二年五月 大阪大学人間科学部長（平成四年四月まで）

平成六年四月 大阪大学人間科学部名誉教授

塩原先生は昭和三十年に京都大学文学部をこ卒業の後、京都大学の大学院に進学し、社会学を修められました。修士論文を書き改めた論文「組織課程の発展と挫折」で、気鋭の社会学者として学会に華々しくデビューし、第三回城戸浩太郎賞を受賞されました。その後、関西学院大学社会学部に七年間、奈良女子大学文学部に三年間、千葉大学文学部に四年間、それぞれ奉職されたあと、四十五歳に

なられた昭和五十一年に、大阪大学人間科学部に移られ、理論社会学・社会学説史講座の教授に就任されました。この年はちょうど人間科学研究科が新設された年に当たり、この新しい社会学専攻を「社会学のナショナルセンター」に育て上げる、というのが先生の夢のひとつでありました。

塩原先生は、優れた教育者としての面をお持ちで、取り分け、後進研究者の育成に心血を注がれてきました。人間科学研究科の院生のなかで、先生に推薦状を書いて頂くことなしに、研究者として自立していった人はほとんどないといつていいほどです。先生の学識の広さと人格的包容力は、まことにたぐいまれで、その影響力は院生すべてに及び、多数の優れた研究者を育てられました。先生のお陰で、創設されてまもない人間科学研究科の社会学は、その地歩を確立することができました。

塩原先生はまた、評議員や学部長を初めとする、学内の要職を歴任され、学部の発展にも貢献されました。教育の面でも、大学運営の面でもリベラルな態度を崩すことがなかった、というのが先生の持ち味だったように思われます。

豊かな学殖と優れたバランス感覚を兼ね備えた先生は、大学の外でも信頼を集め、良きオーガナイザーとして多忙であられました。学会関係では、日本社会学会、関西社会学会、組織学会、社会・経済システム学会、日本宗教学会、リスク学会等々の理事や会長等を歴任され、また、「コスモス・生命・宗教」を初めとして、さまざまシンポジウムを企画立案され、報告や司会の役割を果されまし

た。また生駒調査や集合行動論研究会など幾多の共同研究を主宰され、また中国社会学会の結成などを通じて、中国との学術交流にも貢献されました。大学の枠を越えた社会的活動の面でも大いに活躍されました。

塩原先生は、さまざまな研究者集団の常に結節点に立っておられました。ネットワーキングというのは、先生のご活動を特長づけるキーワードのひとつのように思われます。ある研究者が、現在どのようなテーマに関心を持ち、どんな業績をあげているかを知りたければ、塩原先生にお聞きすればたちどころにわかります。特に他の人がまねできないのは、全国各地に散らばっている若手研究者について、実に正確な知識をおもちであるという点です。先生は若手研究者に、公平にチャンスが与えられるよう、力を尽くされました。

最後に、ご研究の面について簡単に触れさせて頂きます。

先生の研究活動は社会学のほとんどすべての領域に渡る幅広いものですが、単著を中心に分野を整理させて頂けば、大きく分けて三つの分野に整理することができるかもしれません。まず第一が、名著『組織と運動の理論』、あるいはまたリーディング『資源動員と組織戦略』に代表されるような組織社会学・集合行動論の分野。次が社会学原論の分野。バランスが取れた入門書であると同時に、独創的な理論的総合の試みとして世評の高い『社会学の理論Ⅰ』がこの分野の代表作ですが、更にまた、『新社会学辞典』の編纂、『講座基礎社会学』の編集・寄稿といった学問的活動もこの分野に属すると思われます。三番目が、宗教社会学・日本社会学論の分野。最近著

『転換する日本社会』は、この分野の集大成をなすもので、豊かな理論的蓄積を背景に日本の社会的現実に関して興味深い現状分析が試みられています。こうした試みのベースにあるのが、『生駒の神々』や『宗教ネットワーク』などに見られる、日本の民俗宗教調査研究であります。

しかし塩原社会学の最大の特長は、こうした活動分野の多様性が、同時に、その思索の体系的・統一性に貫かれていた点に、求められると思われます。先生は、組織社会学、集合行動論、宗教社会学、社会学原理などを突破口として、専門に閉塞しがちな社会学の諸分野を相互に関連させ、社会学を首尾一貫した知のシステムとして構成し直したいという強い意思を持たれ、たゆまぬ努力を通してこの初志を貫徹されました。先生の学問的営為は、ロバート・K. マートンが理想とした「中範囲の理論」構築のお手本を見る思いが致します。その結果は、第三回城戸賞、第五回尾高記念社会学賞の受賞を含めて、さまざまな学問分野で高く評価されております。

塩原先生は、同時代の社会学の活動全体に関するバランスのとれた鳥瞰図を描き出すことのできた「総合」社会学者の巨匠の一人として、日本社会学の歴史の中で、記念されることは疑いを得ないと思えます。

主要業績

【著書】

- 『組織と運動の理論』新曜社、昭和五十一年六月
『社会学の理論 I』放送大学教育振興会、昭和六十年三月
『転換する日本社会』新曜社、平成六年三月

【編著】

- 『変動期における社会心理』（辻村明・見田宗介と共著）培風館、昭和四十二年三月

- 『社会学原論』（富永健一と共編著）有斐閣、昭和五十年二月
『社会学概論』（本間康平・田野崎昭夫・光吉利之と共編著）有斐閣、昭和五十一年十一月、新版、昭和六十三年九月
『基礎社会学』全五卷（安田三郎・富永健一・吉田民人と共編著）東洋経済新報社、昭和五十五、五十六年
『社会学の理論 II』（編著）放送大学教育振興会、昭和六十年三月

『生駒の神々』（編著）創元社、昭和六十年十月

『日本宗教の複合的構造と都市住民の宗教行動に関する実証的研究——生駒宗教調査』昭和六十、六十一年度 科研・総合研究A

（研究課題番号六〇三〇一〇二四）報告書

『ネットワーク時代の組織戦略』（今井賢一・松岡正剛と共編著）

第一法規出版、昭和六十三年十月

『資源動員と組織戦略——運動論の新パラダイム』（編著）新曜社、平成元年三月

『伝統と信仰の組織——地域に根ざす技と心と家の潮流』（日置弘一郎と共編著）『日本の組織』第一三巻、第一法規出版、平成元年九月

『現代日本の生活変動』（飯島伸子・松本通晴・新睦人と共編著）世界思想社、平成三年一月

『日本型システム——人類文明の一つの型』（日本型システム研究会編）財団法人マスタダ国際交流教育財団 セコタック、平成四年三月

『宗教行動と社会的ネットワーク——現代日本におけるネットワークの研究』平成二、三年度 科研・総合研究A（研究課題番号〇二三〇一〇二三）報告書、平成四年三月

『新社会学辞典』（共編著）有斐閣、平成五年二月

『ターミナル家族』（石川実・大村英昭と共編著）NTT出版、平成五年四月

『宗教ネットワーク』（共編著）行路社、平成六年三月

【訳書】

アルヴィン・ゴールドナー『産業における官僚制』（岡本秀昭と共訳編）ダイヤモンド社、昭和三十八年四月

リチャード・ラドナー『社会科学の哲学』培風館、昭和四十三年一

月

ピーター・ブラウ『交換と権力』（間場寿一・居安正と共訳）新曜社、昭和四十九年一月

【論文】

「組織過程の発展と挫折」『思想』昭和三十四年六月号

「支配過程論」『哲学研究』第四〇巻第九冊、昭和三十五年

「統制主義・組織過程・合意主義」『ソシオロジ』第七巻第三号、昭和三十五年

昭和三十五年

「都市教師論」（木村万平と共著）『思想の科学』昭和三十六年八月号

「戦後日本の社会運動」『社会学評論』第四九号、昭和三十七年

「社会運動」福武直編『現代人の社会学』河出書房、昭和三十八年

「組織論における発想の諸形式」A・ゴールドナー『産業における

官僚制』ダイヤモンド社、昭和三十八年

「フロイト」田中美知太郎編『講座 哲学体系 第五巻 社会科学

と哲学』人文書院、昭和三十九年

「運動における主体性の形成過程」作田啓一編『人間形成の社会学』

有斐閣、昭和三十九年

「組織計画の哲学と産業主義」『関西学院大学社会学部紀要』第九

号一〇合併号、昭和三十九年

「官僚制の組織論的検討」『思想』昭和四十一年一月号

「創価学会イデオロギー」『展望』昭和四十年六月号

「創価学会の社会的基礎」『宗教』昭和四十二年二月号

「組織と個人」万成博・杉政孝編『産業社会学』有斐閣、昭和四十二年

「組織の比較分析」山根常男・森岡清美編『現代社会学の基本問題』有斐閣、昭和四十三年

「社会変動」作田啓一・日高六郎編『社会学のすすめ』筑摩書房、昭和四十三年

昭和四十三年

「青年問題への視角」『社会学評論』第八六号、昭和四十六年

「集団・組織理論」川島武宜編『法社会学講座 第四巻 法社会学

の基礎』岩波書店、昭和四十七年

「比較体制論序説」『思想』昭和四十八年七月号

「ブラウの社会学について」P・ブラウ『交換と権力』新曜社、昭和四十九年

昭和四十九年

「運動とコミュニケーション」内川芳美・他編『講座 現代の社会

とコミュニケーション』第四巻 情報と政治』東京大学出版会、

昭和四十九年

「比較社会システム論と社会学」『現代社会学』第一巻第一号、講

談社、昭和四十九年

「ウェーバー」『社会学講座 第九巻 潮見俊隆編 法社会学』東

京大学出版会、昭和四十九年

「理論社会学における若干の基本問題」『社会学評論』第一〇〇号、

昭和五十年

「現代日本の組織行動と集合行動」今井賢一・土屋守章編『現代日

本の企業と社会』日本経済新聞社、昭和五十年

「日本近代化の再検討」『現代社会学』第二卷第一号、講談社、昭和五十年

「過渡期の社会と科学」『思想』昭和五十年七月号

「運動の社会学理論」『組織科学』第一〇卷第二号、昭和五十一年

「政治集団における組織論」『世界』昭和五十三年五月号

「協同の組織化」GP (General Practice) 七号、昭和五十四年二月

「社会学における組織研究」『年報人間科学』第一号、大阪大学人間科学部、昭和五十年二月

「組織研究と社会学」『組織科学』第一四卷第一号、昭和五十五年三月

「集合行動」『経済学辞典 第二版』東洋経済新報社、昭和五十五年

「交換理論」『季刊労働法 別冊第六号 現代社会学』総合労働研究所、昭和五十五年

「集団と組織」『基礎社会学』第三卷、東洋経済新報社、昭和五十六年二月

「集合現象と組織化」『基礎社会学』第三卷、同書

「組織の中に生きる」『生きる』(大阪大学放送講座) 大阪大学、昭和五十六年

「資源動員論の位置」『社会科学の方法』御茶の水書房、昭和五十八年十月

「運動の社会学の回顧と展望」『創立一〇周年記念論集』大阪大学人間科学部、昭和五十八年

「豪雨災害における防災組織行動」(野田隆と共著)『昭和五十八年七月山陰豪雨災害の調査研究』研究代表者・角屋睦 科研報告書 (NAB-58-3)、昭和五十九年

「都市生活と民俗宗教」『コルモス・シリーズ 第二七・二八回研究会議報告』現代における宗教の役割研究会、昭和六十年

“The Sociology of Social Movement in Japan” (in collaboration with Shinji Katagiri), *International Journal of Mass Emergencies and Disasters*, vol.4, No.2, 1986.

「組織論の変遷について」『日本人の組織帰属意識の変化に関する研究』(社会意識研究会報告書五九一) 財団法人産業研究所、昭和六十年

「組織・仕事・人間像」『日本人の組織帰属意識の変化に関する研究』(社会意識研究会報告書六〇一三) 財団法人産業研究所、昭和六十一年

「バーナード理論と社会学」飯野春樹・加藤勝康編『バーナード

——現代社会と組織問題』文真堂、昭和六十一年

「現代社会と柔らかなシステム」『社会・経済システム』第五号、昭和六十二年

「現代日本における組織化の諸形態」『組織科学』第二二卷第四号、丸善、昭和六十三年

「親密な関係とネットワーク」『相互理解』(大阪大学放送講座) 昭和六十三年

「集合行動と社会運動」本間康平・他編『社会学概論 新版』有斐

閣、昭和六十三年

「防災と組織」(野田隆と共著) 安倍北夫・他編 『応用心理学講座

三 自然災害の行動科学』福村出版、昭和六十三年

「産業社会の変動と社会生活及び意識の変動」『社会福祉士養成講

座 一二 社会学』中央法規出版、平成元年

「社会学」山口昌哉・他編 『学問の現在』駸々堂出版、平成元年

「ブラウの理論構成」徳永恂・鈴木広編 『現代社会学群像』恒星社

厚生閣、平成二年

「成熟化社会の組織化」『農林統計調査』平成二年三月号

「内発的発展」塩原勉・飯島伸子・松本通晴・新陸人編 『現代日本

の生活変動』世界思想社、平成三年

「集団と組織」福祉士養成講座編集委員会編 『改定社会福祉士養成

講座 一二 社会学』中央法規出版、平成四年

「霊能者の条件」岩波講座『宗教と科学 第三卷 科学時代の神々』

岩波書店、平成四年

「二一世紀に向かう社会システム…コミュニティ」『社会・経済シ

ステム』第一号、平成四年十月

「生駒の神々」『適塾』No.25、適塾記念会、平成四年十二月

「日本型システムの類型認識」浜口恵俊 『日本型モデルとは何か

— 国際化時代におけるメリットとデメリット』新曜社、平成

五年
他に、書評、エッセイ、小品等、約七十編。